要約トレーニング（1）

年　　組　　番　名前

1　今回は少し、「あがる」ことについて考えてみよう。「あがる」というのは、ともかく通常の意識状態と異なる意識の状態である。だから、思いがけない失敗をしたり、平素の力が出なかったりする。そこで「あがる」のを防ごうということになるのだが、はたして、あがらないのはいいことだろうか。

2　そもそも「舞台」に立って何かをするということ自体、「普通」でないことをしている。それを観る観客、聴く聴衆にしても、「普通」でないのではなかろうか。演劇であれば、舞台の上で人が死んだり、結婚したりするが、そんなのはすべて嘘といえば嘘である。それを知りながら、泣いたり笑ったりしている観客は、やはり普通の状態ではないところに引き込まれていくわけである。そんなとき、俳優がまったく冷静だったらどうなるだろう。観客はばかばかしくなるだろう。

3　音楽だってそうである。音を通して通常ならざる世界に触れるからこそ、感動が生じたり、心が癒されたりするのだ。スポーツでも、普段以上の力が発揮できてこそ、大勝負に勝てるのだ。

4　とすると、「あがる」ことは必要、というより大切なことだ。「あがる」からこそ、名演奏ができたり、名演技ができたりする。そして、観客の感動もまた爆発的になる。

5　ところが、次の難しい問題は、あがりすぎると失敗するということである。初めに述べたように、われわれは「あがる」と、思いがけない失敗をしたりする。

6　「あがりすぎないあがり方」、そんなことはあるのだろうか。それができる人が、ほんとうのプロだと私は思っている。あるいは、どんなに「あがる」ことがあっても、けっして失敗しない人、ともいえるだろう。たとえば、ハムレットは100回もやったので次は全然あがらない、などというのは名優ではない。101回目もけっこう「あがる」人こそ名優だ。そして、どれほどあがってもけっして失敗がない、という点は十分な練習によって支えられているのだ。

河合隼雄『ココロの止まり木』二〇〇四・五

【要約トレーニング】
①文章全体を読む。
②全体を三つの段落に分け、三つの段落それぞれの役割を考える。
③三段落それぞれの中で重要な一文に線を引く。（書き抜く）
④文章全体の中で最も重要な一文に二重線を引く。（書き抜く）
⑤文章全体を百字で要約する。